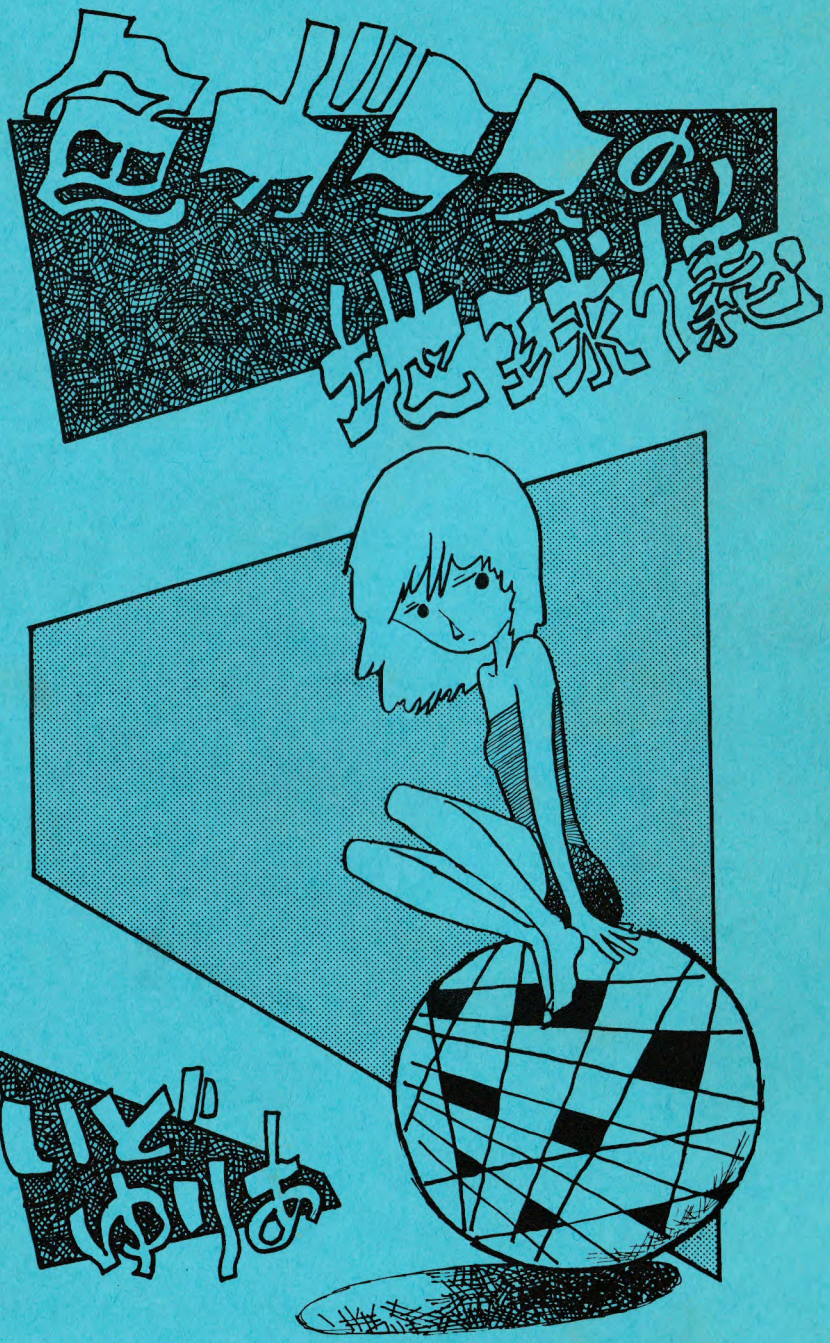
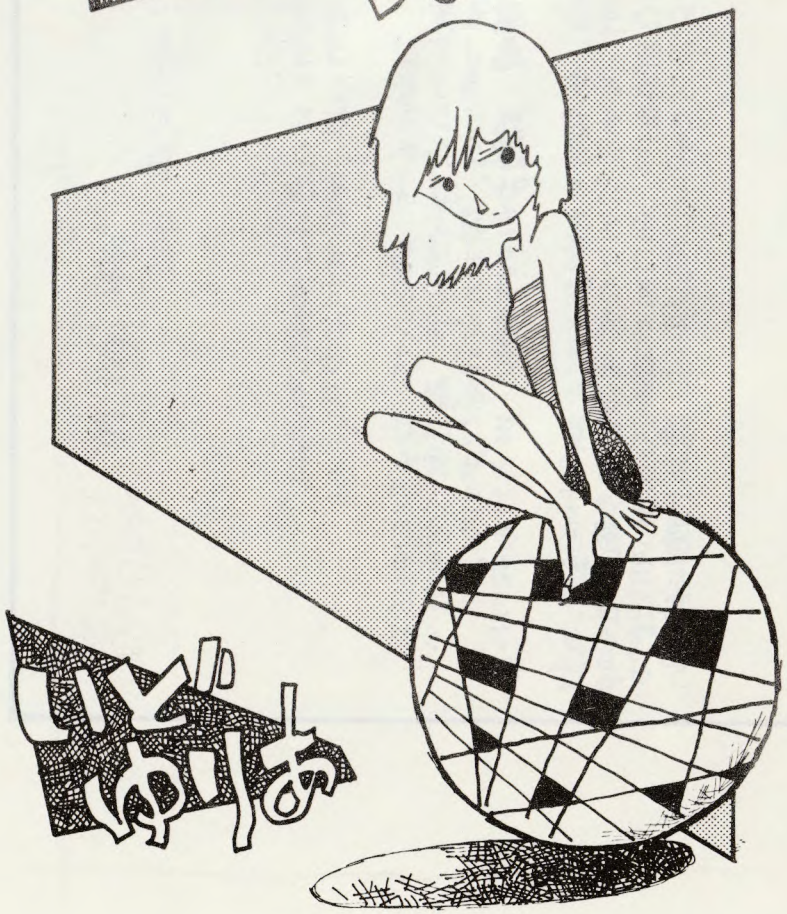

宮沢賢治の
地球儀
いがゆりあ

色々な地球儀



ハヤシ ゆりこ

はじめに

私の世界はステンドグラスのような色がマス。偏見に満ち満ちて
二度と通ることのない四年間の、全にその後半において生みだした
たふさな話を集めました。ひとつひとつの作品はすべての悪い私のふ
供。どうぞ私の知らない、あなたのお友だちにも見せてあげてください。

苦労してくださった編集、原稿がきさんたち、それにもまして岬
氏の素敵な絵。無理を申しました。ほんとうにありがとう。
私の中にこんな夢を育ててくれた人たちに、遠い友人たちに……
ともきくん、しろくん　たかちゃん　まさくん　しょうじさんに。
とどきますか。

この本をかかせてくれたのは　あなたかもしれません。
そして　この本を手にとってくれているあなたさま。
どうも　ありがとう。

一九七九年　三月

From yuna Idy.

色ガラスの地球儀 (1)
地図帳をひろげて、さあ今日はどこへ行こうかな。

雷太の夢 (5)
雷太はかみなりのみ。人間の子供と水遊びをしたいんです

風っ子 (11)
秋に風の子が茂吉をたずねてきました

夏みかんとねこ (16)
あなたがたの猫が"みかん"をたべたい…と喋ったらどうします

星降る夜に (30)
酔っぱらってるのかな。星が降ってきたぞ

五色の豆 (34)
どうして五色豆が五色なのか知っていますか……

ハリーハンプトンの手記 (37)
グリーンのキラキラ光る大きな浮玉が割れて、通信文がでてきた

壊れた河のはなし (49)
とぎちゃんのはしけ船が浮いている河埋めたてられるから大変!

もみの木さん (61)
バスの中で出会った もみの木さんって?

夏至の夜には (64)
夏至にはどうしても不思議な出来事が起きるんですよ

へそまがりのめい (78)
あまのじゃくのめいの好きな男のみゃこどんなる

夏のさ中の秋 (83)
夏休みに畑のおてつだいをしたゆうとりょうこは何を見つけたのでしょう

色ボケラクの地球儀

私には いろいろ妙な癖があるわけだが、どうやら一番強い衝動を伴うのは放浪癖であろうと思われる。

私の心の中には偏見に満ちた世界地図が存在し 生活の中の視覚や聴覚による刺激が私を世界旅行に飛びたたせるわけである。

実際の問題としては、お金という不思議極まる性状を持った物質形態の欠乏により、身体的、物理的移動は不可能なわけだ。しかし 心は自由に！という言葉もあるとおり 二十二年という長い年月にわたり 野生の王国とか大自然の驚異とかその類の番組やら百科辞典やら人間百科やら動物百科やらで好奇心を満たすたびに蓄積してきた知識の力をちょっと借りてみる。それで足りなきゃ、地学や世界史の教科書、はたまたマンガだって絵本だって何だっていいのだが。要は内なる欲求である。

まず地図帳を開いて眺める。今は冬、今日はやたらに寒いからと、アフリカあたりを開いてみる。

私の地図帳は古いので 友人のも借り

てくる。わけのわからない独立国の名前やら　キリマンジャロというひびきやらまあ早い話が連想ゲーム的なものが出発段階である。もうこうなると、現実なんてくそくらえだ。人力車の走るチョンマゲ日本ってくらいな気持で　外人さん達の想像上の日本があるのと同じように私の心の中にも物語的、ロマン世界地図があるのであろう。

時空を越えて、ザイール共和国なんていわない。「コンゴ」である。ダイヤモンドの原石掘りとか、タンザニアなんてケニアなんて、まったくしまうまの群れや木陰で眠るライオンやジャングルの中の大トカゲ、またエチオピアという高い所にある国への憧れや青ナイルだの白ナイルだのアスワンハイダムなどという夢もアフリカにはあったりする。

コートジボアール（象牙海岸）、もう興奮の極みといった感じで…張んでいまうんだなあ、これが。紅海というひびきも私には忘れられない思い出が……。とこれは想像にのめり込んでゆけば自然前回に行った時のことも覚えてたりするようになるのだから恐ろしいものだ。

エジプト11月の砂漠という短絡は小さい頃に見た絵本のさし絵のラクダ上の王子さまとお姫さまからきているだろうことは察しがつく。それでもいいのである。ルブアルハーリー砂漠とか中近東、アフリカ、中央アジアあたりは私のお気にいりのコースである。

中国からトルコの市場に致るキャラバンの通るシルクロードなんていうのも大のお気に入りだったりして　動く湖ロブ湖やら、中国の山水画的、大ゆったり場子江なんかもやめられない魅力である。

湖西のあたり……杜甫のように李白のように。

シンチャンウィグルなんていう素敵な名前の場所もあって　テンシャン（天山）山脈とカラコルム、崑崙の山脈に囲まれたタクラマカン砂漠という大活劇舞台となる場所もある。

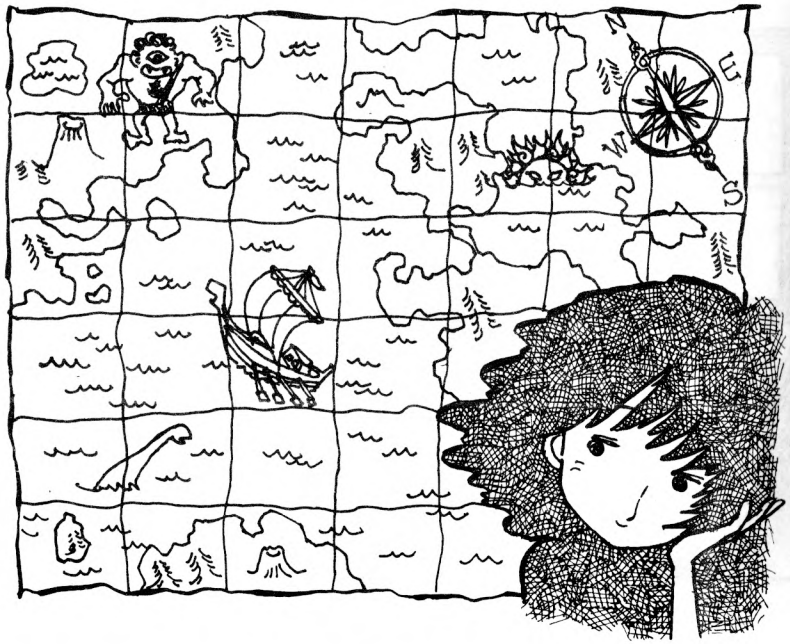
ソビエトに入るとなんといってもシベリア平原の夕陽であり　極寒の地としてはラップランド　グリーンランドも含め北極地域に思いをはせる。

高校生の頃には南氷洋にあこがれて、体育館の屋根（これが実に広大な氷原に見えたりする）を犬ゾリでかけめぐっていたりしたものだった。そればかりか本人はちゃんと行った気になって、シモヤケ（凍傷とまではいかないが）になったりするほどだ。

島も大好きで　どういうわけか島というと南というか赤道直下という気分でマリアナ諸島からはじまって、サモア、フィージー、ジャービース島周辺などはやたらのガイドブックの写真よりも鮮明に見える程だ。

グレート・バリア・リーフは夢かなって行って以来、巨大なマンタ（いとまきえい）との出あいというお気にいりのテーマ以外、あまり行かないようである。

しかし、ここまで書いて来て　不思議なことは若き女性たちの憧れは　どこへ行ったのかと思い、はたと考えてしまった。ヨーロッパのお城なんていうのが、抜けているのである。アメリカもそうだが　私の人間的なひずみというのは案外この辺にあるのかもしれない。



考えてみれば、ロッキーマウンテンとかジャスパー、アルバータ付近、はたまたオクラホマ、アーカンソーのコーン畑やらアンデス山脈、驚異のアマゾンといった頃もはるか昔にはあったような気もしている。（中学生の頃か）

けれども決して　ニューヨークの雑踏とかパリ、ロンドン、ベルリンの街並みに思い当らないのは何故であろうか。オランダの風車やらスイスのユングフラウなんかが　絵でしかないのはどういうわけだろう。

心騒がすものがないのである。唯一の例外は、クリスマス。マフを手にした小さな子供や大人たちが雪の積った道を讃美歌をうたいながら、キャロリングしている姿には　なぜか思いをはせるのである。家の窓からは、白熱灯の黄色っぽい光が見えて　アドベントクランツの四本のろうそくと赤いリボン云々。

要するに身勝手な想像なわけである。それでも　このごろでは　何にも増して日本の農家の縁側で（がラス戸の締っている板ろうか）冬の日だまりの中、太ったミケ猫をひざに、ぼんやりとしている姿なぞばかり思うのは　いったいどうしたことだろう。

年には勝てないということかもしれないなあ。。。。

おしまい

雷太の夢

ドロロロ。。。。ドーンゴロゴロ。。

少し離れた所で今日も雷太のお父さんがおこっています。なんでも、なまり色した雨雲のふとんをつくるのに必要なまっ白な入道雲の綿がたくさんできているのにお母さんが忙しかったので外側のなまり色のカバーが足りないらしいのです。雷太のお父さんは　ひどいおこりんぼです。とくに暑い時にはいらいらして、しょっちゅうゴロゴロと音をたて、光を束にして下の方に向って投げつけるようなうさ晴らしをするのでした。

雷太の家は雲の上にあります。家というても建物があるわけではなく、おとうさんのつくるふとんわたの上にすんでいるのですが。。。そうですね。人間達からいえば、雷太はかみなりの子供ってわけでした。

雷太はまだ小さいので仕事の手伝いはできません。毎日、少し低い所にできた雲にとびうつって下の人間の子供たちをみたり、高い雲へつたう道を一生懸命、登ったりして遊び暮らしております。

雷太には友人がいませんでした。なぜって、かみなりはそんなにたくさんは、

今の時代に生きておりませんでしたから。
「今日はなんだか疲れちゃったなあ。随分と低い所まで降りていったもの」そう思いながら、雲のふちが金色から橙色へそしてまっ赤に移り変わってゆく中を、雷太は落ちないように雲をしっかりふみしめながら、家へと帰ってきました。おとうさんはまだ遠くでおこっているし、おかあさんはカバーをつくるのに一生懸命です。

雷太は『ふあー』とあくびをすると、今日つくったばかりの一番上等の雨雲をひっぱり出してきて、もぐり込みました。その夜の雷太の夢は、昼間見た人間の子供たちと一緒に遊んでいる夢でした。彼らは大きな川で泳いだり、潜ったり、朝から夕方まで楽しそうに水遊びを繰り返していたのでした。

雷太はおとうさんから„絶対下の世界に降りてはいけないぞ、おまえにあって人間にない、その頭のまん中の角を見られたら、つかまえられてひどい目にあわされるからな。„ときつく言われておりましたので、この一週間くらい暑い毎日をできるだけ近い雲を探しては穴をあけて、子供たちの水浴びをうらやましくながめていたのでした。

雷太の住んでる雲の上には水の粒はありますが、池や沼、まして川などはどこにもありません。河って流れてるみたいだけど、どんな感じかしら？雲のようにうまく乗れるかな。人間たちはうまく乗っかって動いていくようだけど＊＊＊＊僕もやってみたいなあ、雲の間にある水の粒はどうしてあんなふうに水の流れにならないんだろうか。そんな思いが集まって雷太は水浴びの夢をみたらしいのです。夢の中では水は雲よりもかたいゼリー状のものでした。体が半分めり込んで首だけだして子どもたちははしゃいでいます。雷太もその中におりました。おとうさんがみたら　どんなに恐しい顔でおこることでしょう！そうだ、みつからないうちに雲の上へ帰らなきゃ。と大あわてで手足をばたばたさせたとたんに目がさめました。

「あれ、うーん。おかしいぞ。今まで確か人間たちと遊んでたんだがなあ。あっ」おとうさんはどうしただろう。とまわりをみまわすと、ふかふかの雨ぐものふとんの中だということがわかりました。

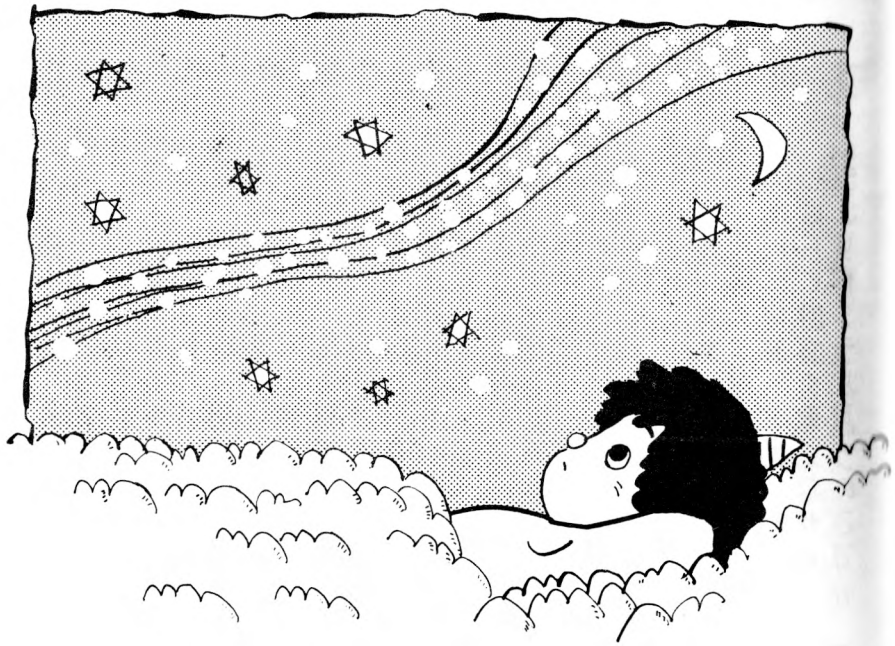
「なあーんだ夢か、だけど泳ぐってのはなかなか面白いようだったぞ。うーん」雷太は考えます。おとうさんは恐しいけれど、何とかして泳ぎたくてしかたがなくなったのです。けれど良い知恵が浮かびません。それまでうつぶせになって、ほおずえをついていたのをため息をつきながらゴロンと上向きになりました。

雷太の目の前にはキラキラした夜の星々が目にうつります。

「ううん、下に降りずに河に入る方法か」と口に出していってみました。その時、すっと流れた星をみていた雷太は目の端に天の川をみつけたのでした。

「あっそうだ、天の川なら人間はいないぞ。お父さんに見つからないようにゆけば、うまくゆくかもしれない。でも確か天の川へは夜しかいけないなあ」もう随分と遅い時間でしたので、きっと誰にも見つからずにいけるにきまっています。そう思うともういてもたっても、いられません。

「よおし、今から行ってこよう」そういうと雷太はふわふわしたふとんから抜け



だして、ぬき足、さし足、少し高い雲に登りはじめました。

雲というのはやたらふわふわしていて長年住み馴れている雷太でさえも、しょちゅう踏み抜いたり足をとられてひっくり返ったりするものです。その上高い所にある雲は細くちぎれ易いうえにもろいものですから、それはそれは気をつかいました。雷太はいまでは、これまでに来たことがない程高くまで登っていました。まわりには、手のとどきそうにピカピカとうす青や赤い光を発して星々がちらばっています。横っちょの方では、懸命に高い所の雲を探している雷太のことを黄色ぽい光の中に輝らし出している月が、ちょっと笑ったようでした。雷太は

「フウフウ、ああ疲れた。ここまで来ればもうお父さんも気がつかないさ。さあもう一息だ。こっから先は雲がないもの、小さな流れ星でも拾わなきゃ」といってぐるりを見まわしました。

そうして、やっと天の川のかわらに着いたのはもう夜中も大分まわった頃だったのです。天の川の水はペカペカと輝りながら流れてゆきます。それは雷太が、昼間の光の中で雲のうえから羨やましく見おろした地上の川の水とは少しちがうようでした。けれども雷太は、そんなことはちっともかまいません。少し高く土手になっている所をみつけて、さっそく飛びこんでみようと大はしゃぎです。

「少し恐いな。でも人間たちだってやってたじゃないか、ええい」どぶーん。

チラチラしたしぶきが飛び散りました。雷太はといえば、生まれてはじめて河につかったら、どんな人でもなるように、おぼれてしまいました。鼻の中も口の中も水がいっぱいで、苦しい上に手足をどんなにばたばたしても、ちっとも浮き上ろうともしません。

「うゆあ。ブブ」とか声にならない声でゴボゴボいいながら、流されてゆきます。少し行くと、川が曲っておりましたから、やっとなんとかはいずり上ることができたのです。

「ゴホ、ゴホ。ああ、ひどいもんだ。冷たいやあ。人間の子供たちは上手に水に乗っていたのになあ」と岸に腹ばいになって、しばらく呼吸を整えながらいいます。もうこりたろうと思うのですが、雷

太はまたしばらくすると、元の土手の所まで元気に走っていっては、とびこみ、おぼれるのをくりかえしていました。それを横っちょの方にがかった月が、はりついたような笑い顔で見ていたせいばかりではなかったでしょうが、よくも続くものだと思うほど何回も何回もとびこんでは苦しそうに岸に上ってきていました。もう下の方は少し白っぽいお日様の光がさして来る頃のことです。ついに雷太は水の表面に、ぽっかりと頭をうかべてひら泳ぎをしていました。うれしそうに手と足をかいっぱい動かしています。小さな手のひらは冷たく光る水をかき、足はピュンピュンと伸びたり縮んだりしながら水をけって、前へと進みます。その動きにつれて、ちょっぴり角の見えているぬれて光っている雷太の頭が、浮いたり沈んだりして流れているようです。さすがにそうしているうちに、疲れてきたのでしょう。

「ゆあ。ぼく、泳げるようになったんだ。今日は来てよかったなあ。子供たちもいっしょならもっと楽しいだろうけど」という思いに〝もう〟お父さんたちが起きる

前に帰っていなくちゃあ。という考えがまじり始めました。そして、そう思うと大急ぎでなければ間にあわないことに気がつきました。だって下の方に見える白い雲のふちはきれいなフラミンゴ色に染まり始めていたのですから。

一生懸命走って、雷太はやっとお母さんが起こしにくる少し前に自分のふとんにもぐり込むことができました。

寝たふりをしても お母さんには、雷太を起こしに来たとき何があったのかちゃあんと分ってしまいました。それはそうです。ペカペカと光る天の川の水が、雷太の体中に髪にも手にも鼻の頭にも、いっぱいついていましたから。でも、おかあさんは何んにも言いませんでした。

「雷太、朝ごはんの前に今日は、おふろを浴びなさい。きれいに洗うのよ」といっただけでした。それは、昔おとうさんもおかあさんも小さい頃に雷太と同じことをしたことがあったからにちがいありませんでした。

そして、その日はお父さんにお母さんがその話をしたらしくって、みんな一日中幸せそうに暮しました。おとうさんも雷太が自分の小さかった頃のように育ったのかと思うと、うれしいのでした。だってついこの間まで、赤んぼうだった気がしていたのですから。

ただ雷太だけは次の日も、体のあちこちがズキズキと痛んだりして、余り元気というわけにはいかなかったようでした。

＊＊＊＊＊＊

おしまい

秋もたけなわのある晩のことでした。

茂吉は、すっかりと寝る用意を終えて、「さあ、もうねるべか」とつぶやきました。すると、そのとき、表の戸をたたく音がいたします。

「はあ、こんな夜中に来るとは誰だべ、性悪のたぬきつねかしれんぞ」

そう悪って、土間におりながら、

「だれだあ、なんか用かあ」と大きな声できました。すると、なにやら頼りなげな子供の声で、

「いれてくれろ―、すまねす、おらあ風の子だがあ」と、答えが返ってまいりました。茂吉は、それは仰天して、

「いまじぶん風の子とは、はあ随分と変てこりんな客だあ」といいました。それでも茂吉は親切な男でしたので、戸にしてあったつっかい棒をはずして、ちんこい男童のかっこうをした子供を入れてやったわけでした。

「ありがてす、まあ、おらあすっかりだめかと思った」 風の子は、ヒウヒウと息をつきながら、さあっと座敷へあがりました。

「どういうわけで、おらんとこさ来た」